

不埒な社長はいばら姫に恋をする

プロローグ 夢は賞金稼ぎ

綺麗なものには引力がある。

光沢のあるシルバーの生地きじに同系色のレースを重ねた上品なデザイン。そのドレスを見つけた瞬間、芦田谷寿々花あしたやすすずかの手が自然と止まった。

落ちて着いた色味ながら、レースにあしらわれた花の図柄えがなが美しく、ドレスを華やかな印象にしている。

細身のAラインドレスは、普段大人びたシックな装いよそおを好む寿々花にとって、多少華やかすぎる気もした。けれど、大切な親友の結婚式に着ていくのだから、これくらい華やかなドレスでも許されるだろう。

なにより、引き寄せられるように伸ばした手を、ドレスから離す気になれない。

感性を刺激する美しいものに、とことん惚れ込んでしまうのは寿々花の癖くせみたいなものだ。

別にそれはドレスや宝石に限った話ではなく、疎水そみづを流れる水が作る渦うずの形や、何気なく手にした松ぼっくりのフィボナッチ数列なすびなの美しさにも当てはまる。

それらは寿々花にとって等しく美しいものだが、人からはあまり共感を得られたためしがない。

さすがに三十にもなれば、数学オタクの寿々花が熱心に話すことの大半が、周囲には理解しにくいことなのだ」と承知している。

「それにするの？」

ドレスを手に物思いにふけていた寿々花は、声のする方へ顔を向けた。

一緒に買い物に来ている友人の柳原涼子が、寿々花の手元へ視線を向ける。

「うん。なんだか引き寄せられて」

そう返した寿々花に、涼子は「大袈裟にため息を漏らす。

「なにも見ないで服が買える人はいいなあ」

一瞬、値札のことかと思つたが、涼子は両手を自分の腰に添えていた。

涼子も十分痩せていると思うが、彼女の目には寿々花の方がスレンダーに見えるらしい。

「たぶん許容範囲だと思っから」

言いながら、サイズを確認するフリをする。

本当は、服のサイズの微調整は、いつも芦田谷家お抱えのテーラーに任せていた。でもそれが、世間一般の感覚から逸脱していることはこれまでの経験から承知しているので、口には出さない。

「いいなあ、いいなあ」

楽しみに繰り返しながら、涼子の意識はラックに掛けられた色とりどりのドレスに向いている。

自分は自分、他人は他人と、割り切って付き合ってくれるのは、彼女のいいところだ。

しばらくして、涼子の手がモスグリーンのドレスで止まる。

裾がアシンメトリーにカットされているそのドレスは、脚の綺麗な涼子に似合いそうだ。

「いいわね。涼子さんに似合いそう」

寿々花が言うと、涼子の口元に小さなえくぼができる。

「そういえば、寿々花さん比奈のドレス姿見た？」

モスグリーンのドレスをいろいろな角度から確認しつつ、涼子が聞いてきた。

寿々花は首を縦に動かす。

おそらく涼子も、寿々花同様、ドレスを試着した時の写真を見せてもらったのだろう。それを思い出すように「可愛かったなあ」と、彼女が呟く。

「本当。すごく素敵だったわ」

愛する人と結ばれた友人を見てみると、自分のことのように嬉しくなる。

寿々花がしみじみ同意すると、涼子もうっとりとした表情を浮かべた。

「やっぱりウェディングドレスは、女子の憧れよね」

そこで涼子は、はたと目を見開き、寿々花を見た。

「……私、この年には結婚しているはずだったのに……」

どこで人生プランが狂ったのだろうと唸る涼子は、なにかを思いついた様子で口を開いた。

「ねえ、寿々花さんの子供の頃の夢ってなに？」

「え？」

突然の質問に、寿々花が目を見開かせる。

「子供の頃の夢？」

「そう。たとえば比奈は、仕事と幸せな結婚を両立させるのが夢で、それを見事に実現させたわけじゃない？」

モスグリーンドレスを体に重ねて、いろいろな角度から鏡を覗き込む涼子の言葉に、寿々花は納得する。

親友の比奈は、寿々花と涼子が勤める世界的自動車メーカー、クニハラの次期社長であり、現在は専務を務める國原昂也と結婚することになった。いわゆる玉の輿というやつだが、別に比奈が玉の輿を狙っていたわけではない。

ただ子供の頃からの夢を追いかけた結果が、そういう形に落ち着いたというだけだ。

「で、ふと寿々花さんの子供の頃の夢って、なんだったのかなと思って」

そう言っつて、涼子が寿々花にチラリと視線を向けた。

「私の……子供の頃の夢は……」

躊躇いがちに小声で呟く寿々花に、涼子が首をかしげる。

「ん、なに？」

——嘘をつくほどではないけど、人に話すのはさすがに恥ずかしい。

微妙な沈黙の後、寿々花は思い切っつて子供の頃の夢を口にした。

「懸賞金を稼いでみたかった」

「はい？」

素っ頓狂な声を上げた涼子は、一瞬、手にしていたモスグリーンドレスを落としそうになる。

慌ててハンガーを握り直した彼女は、怪訝な顔で海外のアクションドラマのタイトルを口にした。

「どうやら涼子の頭の中では、悪者を華麗に捕らえるワイルドなヒロインの姿が浮かんでいるらしい。」

「ただ寿々花の言う賞金稼ぎとは、そういう類いのものではなかった。」

「ミレニアム懸賞問題って知ってるかしら？」

その問いかけに、涼子が首を横に振る。そこで寿々花は、ミレニアム懸賞について簡単に説明した。

ミレニアム懸賞問題とは、アメリカの数学研究所が懸賞金をかけた至極難解な数学問題のことだ。数学七大難問とも言われ、現在そのうちの一問だけが解明されている。

「数学の問題を解くだけで、そんなにお金もらえるの？」

一問解決すれば一〇〇万ドルという賞金額を聞いた涼子が、目を剥いて驚く。

涼子は未知の世界に興味津々といった感じで、質問してきた。

「で、その問題は全部解けそうなの？」

「まさか。そんな簡単に解けないから、高い懸賞金がかかっているのよ。だけど大学までは、本気で解こうとしていたの」

今思えば、己の力量を過信した若かりし頃の無謀な夢ではあるが。

「でも、賞金なんてもらわなくても、寿々花さんはお金に困らないじゃない？」

涼子がさらりと言う。

その声があまりにあっけらかんとしていて、寿々花も軽い感じで肩をすくめた。ごく親しい友人にしか打ち明けていないが、寿々花の実家である芦田谷家は、あけぼのエネルギーという日本のエネルギー産業に多大な影響力を持つ大企業のトップを務めている。

涼子の言うとおり、よっぽどのことがない限り、寿々花がお金に困ることはまずないだろう。寿々花がミレニアム懸賞問題を解きたかったのは、高額な賞金のためではない。

なんの不自由もなく与えられすぎる生活の中で、世界が難問と認める数式を自分の力だけで解き明かすという達成感に憧れたからだ。

数学はこちらが正しく問いかければ、正しい答えを返してくれる。寿々花の育ちや親の権力を気にすることもないし、媚びることもない。無視をすることもなければ、嘘をつくこともない。

学生時代、人間関係の煩わしさに辟易していた寿々花にとって、数学は最高の友人であり遊び相手でもあった。

そんな数学で、誰の力も借りず自分の力を試せる。それは、友人からの最高の贈り物のように思えたのだ。

「お嬢様も、なかなか大変なのね」

苦笑する涼子に、寿々花は曖昧な笑みを返した。

「まあね。でも父のおかげで、私は数学者としての限界を見極めるだけの十分な時間を、学生時代に与えてもらえたわ」

ただ、それによつてますます一人を好むようになった寿々花を心配し、父だけでなく二人の兄たちまで過干渉になつて迷惑している。

贅沢な悩みと怒られそうだが、望みの玩具を買い与えるように、人間関係も与えられると思つている家族の愛情が、ありがたくも息苦しい。

複雑な心情を吐露する寿々花に、涼子が明るく言った。

「そう思うなら、恋人の一人でも作つて親を安心させてあげればいいじゃない」

「え？」

軽い口調で提案された内容に、思わず目を丸くする。

「だって、寿々花さんが一人でいることを心配しているなら、いつも一緒にいてくれる恋人ができれば安心して静かになるんじゃないの？」

寿々花はそれを想像して、頬を引き攣らせた。

「それは、どうかしら……」

過去に一度だけ見た見合いが破談になつた時、父はやけに上機嫌だった。

身勝手極まりない話だが、父は娘の人生に友情は必要だが、恋愛は不要だと考えているらしい。

父のお眼鏡にかなつた相手との見合いでさえ、破談になつて喜ぶのだ。もし寿々花が、父や兄たちの望まない相手と恋愛しようものなら、一体どんな面倒に繋がるか……

だからといって、家族の顔色を気にしながら恋人を選ぶなんてこともしたくない。

「なんだか、相手の方に迷惑をかけそうな気がするから、その提案は遠慮しておくわ」

あれこれ考えた寿々花がそう返すと、涼子が下唇を突き出すようにして不満の声を上げる。
「えー、なんでそこで諦めちゃうの？ 障害があるからこそ、恋愛に憧れを抱くものじゃない？
そういうの、お伽噺のお姫様みたいでよくない？」
「……？」

今の話をどう転換させたらお伽噺のお姫様に繋がるのだろうか。
首をかしげる寿々花に、涼子がニンマリと微笑んで言った。

「面倒な家族という棘の塔に閉じ込められているお姫様を、カッコイイ王子様が愛の力で救い出す。
そんなシチュエーション素敵じゃない。時間をかけて数学の難問を解明するより、ずっと早く幸せ
が手に入るわよ」

「別に私は、閉じ込められてなんかいいわ。第一、そんな他力本願な幸せを求めるなんて、相手
にも申し訳ないし」

真面目に言い返す寿々花に向かって、涼子がわかってないと首を振る。

「王子様が求めるのは、お姫様の愛だけよ。だから寿々花さんも、相手を心から愛せばいいの」
「……」

愛が全てを救う……それこそ夢物語だ。

「なんてコスバのいい幸福論っ！」

そう言ってガッツポーズを作る涼子の様子から、彼女が悪乗りしているのだとわかった。
じとつと冷ややかな視線を向けると、悪戯っぽく舌を出して涼子は試着室へ歩いていく。

そして、後に続く寿々花に言った。

「とにかく、恋は運命なの。もし運命の人に出会ったら、否応なく恋に落ちるし、親がどうのなん
んと言っていられなくなるわ。自分の意思に関係なく問答無用で相手に引き寄せられて、離れられな
くなるんだから」

もっともらしく語る涼子が、試着室の中へと消える。

「……そういう涼子さんが、今もおフリーなのは何故？」

思わず突っ込むと、一度閉められた試着室の扉が開き、涼子が首だけ出した。

「運命の恋人が、私を未来で待っているからです。だから気合を入れて、ドレスを選ぶのよ」

綺麗に口角を上げ、フフツと笑った涼子が再び試着室の中へ消えた。

「恋に引力があるのは本当だからね。比奈と國原専務がいい例でしょ」

試着室の中から、涼子の声が聞こえてくる。

「確かに……」

あの二人は、夢物語のような運命的な恋を、現実で実らせた。

幸せそうな比奈を思い出し、自然と寿々花の口元に笑みが浮かぶ。

「こうなったら、三人仲良く運命の相手を見つけて、幸せになりましょう！」

力強く宣言する涼子の声を聞きながら、寿々花も近くの鏡にドレスを合わせた自分を映した。

恋の引力とは、このドレスに引き寄せられた時の感覚に似ているのだろうか。

引き寄せられ、魅了されて、手を離すことができない思い――

服なら買えばいいし、数学なら気の済むまで没頭すればいい。ただ、それを人に対して抱いた時、自分はようになってしまおうのだろう。なりふり構わず、それこそ家の力を使っても、相手を手に入れたと思うのだろうか。自分が自分らしくいらなくなってしまうかもしれない。寿々花は、人知れずそんな不安を抱くのだった。

1 自分らしく

六月最初の大安吉日。

比奈と昂也の結婚式は、都内にあるとは思えないほど見事な庭園が有名な格式高いホテルで執り行われる運びとなった。

式が始まる前、寿々花はホテルのパウダールームで、鏡に映る自分の姿を確認する。

一目惚れして買ったドレスは、お抱えのテーラーによって、サイズの微調整と多少のアレンジを加えられ、寿々花のための特別な一着へと仕上がっていた。

「そのドレス、似合ってるね」

隣で自分のメイクの最終チェックをしていた涼子が言う。

「ありがとう。私には、少し華やかすぎるけど」

結婚式ということもあり、髪もメイクもプロにセットしてもらった。アクセサリーや小物も、ドレスに合わせてコーディネートしている。

いつもと違って華やかな装いの自分に、寿々花はつい言い訳を口にしてしまった。

芦田谷家の娘として、自分を華やかに見せる術は心得ている。だが、数学オタクの自分がご令嬢然として振る舞うのは、本当の自分じゃない気がして恥ずかしくなるのだ。

そんな寿々花を、涼子が笑い飛ばした。

「その基準、誰が決めたの？」

「誰って……」

誰だろうかと、首をかしげる。

その時、寿々花の脳裏に一人の女子の顔が思い浮かんだ。

名前までは思い出せないが、中学の時同じクラスにいた女子で、常に寿々花に対して否定的な態度を取る子だった。

クラスの中心的人物だった彼女は、寿々花が新しいものを身につけたり、髪型を変えたりする度に、「らしくない」「似合わなくて変」と貶めてきた。

さらには、次第に数学に没頭するようになった寿々花を変人と行って嘲笑った。

クラスの中心にいた彼女が寿々花を否定したことで、いつしかクラス全体がそうした空気になっていた。虐めというほどではなかったが、ことあるごとに否定され続けられ、自然と心が萎縮していく。結果、学校では極力目立たず、人との関わりを避けて過ごすようになったのだ。

そのせいか無意識に、華やかに着飾るのは自分らしくないような気がしてしまふ。

「せっかく美人でリッチな女子に生まれたんだから、そんな自分を最大限楽しめばいいのに。私なら、間違いなくそうするわ」

今を楽しむことに貪欲な、涼子らしい一言だ。

「ありがとう」

微笑んでお礼を言う寿々花を、涼子が鏡越しに睨む。

「本気にしてないでしょ。そんなよくわからない誰かの基準なんて忘れて、会社でもゴージャスリッチな美人路線でいけばいいのに。そうしたら、恋人なんてすぐにできるわよ」

「それは、遠慮しておく」

研究職で理系男子の多い職場にいるため、必要以上に華やかな装いをする周囲が扱いに困らしいのだ。

今の会社に入ってしばらくした頃、少し打ち解けてきた同僚に「初めは、ニワトリ小屋に、一羽だけ孔雀が交ざってるみたいで落ち着かなかった」と言われた。

その同僚曰く、孔雀とニワトリでは同じ鳥でも格が違うので、話しかけるどころか、目も合わせちゃいけない気がしたのだとか。

未だに女性研究者を軽んじる者も少なくない業界なので、遠巻きにされているのはそのせいかと思っていたが、理由を聞いて拍子抜けしたのは最近のことだ。

また周囲に萎縮されては堪らないので、会社ではシンプルなお洒落を楽しもうと思う。

「でも、そう言ってくれる人がいるのは嬉しいわ」

自分のことを肯定し本気でアドバイスしてくれる涼子に、素直にお礼を言う。

すると、微かに頬を赤らめた涼子が「美人は得ね」と、少しの嫌味も感じさせずに唸るので、笑ってしまった。

最初、友達の友達という形で出会った涼子だが、今では寿々花のかけがえのない友人の一人に

なっている。

そのことを嬉しく思っていると、涼子が腕時計を確認して言う。

「式までまだ時間があるから、新婦のところに顔を出さない？」

「迷惑じゃないかしら？」

躊躇う寿々花に、涼子はあつさり首を横に振る。

「迷惑なことをしても、迷惑にならないのが親友の利点よ。あの子、間違ひなく緊張してるから、からかひに行きましょう」

「……そうね。からかつてあげましょう」

二人は鏡ごしに視線を合わせ、同じタイミングで微笑む。

パウダールームを出ると、ロビーの所々で談笑する人だかりが目につく。

華やかな装いの女性より、落ち着いた色合いのスーツを纏う男性が多いのは、新郎新婦の育ってきた環境の違いだろう。

新婦の小泉比奈は、ごく一般的な家庭で育ってきた。対する新郎は、日本を代表する自動車メーカー、クニハラの御曹司である。

それもあつて新郎側の招待客には、政財界の重鎮が顔を揃えており、会場の平均年齢を引き上げていた。

そうした顔ぶれの中には、いついかなる場所でもマウントを取らないと気が済まない御仁も多い。互いに褒め合っているようで牽制し合っている会話が、そこかしこで繰り広げられている。

その中でも一際目立っている一団を見つけ、寿々花はそつと顔を背けた。

寿々花の父であり、あけぼのエネルギー会長でもある芦田谷廣茂と、その取り巻きたちだ。

——他人のフリ。他人のフリ。

涼子の陰に隠れるようにして歩く寿々花は、心の中で繰り返す。

幸い父は寿々花に背を向けている。話も盛り上がっている様子なので、このまま通り過ぎれば気付かれないだろう。

それに向こうは新郎側で、こちらは新婦側の招待客だ。

親友の晴れの日を純粹に祝ひに来ているのに、父の取り巻きの世辞に付き合わされるなんて冗談じゃない。

「玉の輿に乗るのも大変ね。比奈は、好きな人と結婚するだけなのに」

よく響く声で笑う一団や、比奈への嫌味を囁く女子たちを尻目に、涼子が呟く。

「そうね。でも比奈さんなら、あんな人たちには負けないと思うけど」

二人の育った環境への配慮から、内輪だけの式にしようという意見もあつたそうだ。だが比奈が、「悪いことをするわけじゃないし、祝ってくれる人に遠慮させたくない。だから環境の違いも含め、ありのままの二人で式を挙げればいい」と申し出たらしい。

親友として、状況に臆することなく前向きに挑んでいく比奈を、誇らしく思う。

——あれこれ深読みした挙句、萎縮して諦めてしまう私とは大違いだ。

比奈と出会い、自分も変わりたいと思つて職場を変えたのに、すぐに弱気な自分が顔を出す。よくないことだと反省していると、斜め前を歩く涼子がふと足を止めた。

「あれ、スマホがない」

そう言うなり、いきなり回れ右して振り返ってきた。

「——っ！」

涼子の動きに驚き、寿々花が咄嗟に背中を反らす。

その拍子に、いつもより高いヒールを履いていた寿々花はバランスを崩した。

「あっ」

体勢を立て直すことができず、そのまま後ろに倒れていく寿々花の姿に、涼子が口元を手で覆う。

床に倒れることを覚悟した次の瞬間、寿々花の体を誰かが支えた。

「危ない」

艶のある低い声と共に、腰と肩に大きな手の感触が伝わる。

「……」

なにが起きたのかわからず茫然としてっていると、大きく開いた背中に人の温もりを感じた。それと同時に、複雑に絡み合った男性物のオードトワレの香りに包まれる。

「大丈夫？」

後ろから落ち着いた低音ボイスが耳に触れる。

「はい」

体を捻つて背後を確認すると、彫りの深い美しい男性の横顔がすぐ側にあつた。

その事実には驚き、再び体のバランスを崩してしまう。

「おっと」

倒れそうになる寿々花の体を、男性が力強く支えてくれる。

寿々花の肩と腰を支える彼の手にぐっと力が入り、無意識に体が強張ってしまう。一旦落ち着くと深く息を吸えば、男性のオードトワレの香りを意識して悪循環に陥る。

まるで水のない場所で、溺れているような気分だ。

「なにやってるの。大丈夫？」

最初こそ寿々花を驚かせてしまったことに焦っていた涼子だが、呆れつつ腕を引いてくれた。

男性の体から離れたことで、やっと体が本来の平衡感覚を取り戻す。

「ごめん」

気まずさを感じながら涼子に礼を言った寿々花は、すぐに後ろを振り返り、深く頭を下げた。

「助けていただき、ありがとうございます」

しかし、顔を上げた瞬間、再び硬直することになる。

さっき見た時も整った顔立ちだと思つたけれど、改めて向き合った彼は、ギリシャ彫刻のようにならずに整った容姿の持ち主だった。

背が高く、肩幅もある。背中を感じた印象からしても、かなり引き締まった体躯をしているのだ。

ろう。

そんな恵まれた容姿の持ち主である彼は、こだわりを感じさせる凝ったデザインのスーツを上着く着こなししている。

服に着られている感がなく、お洒落や上質な服に慣れているのだと察せられた。

「転ばなくてよかった」

男性が穏やかに微笑んでそう返す。

黒髪をオールバックにしていることで、綺麗な鼻筋や涼しげな二重の目、形よく整えられた眉がよく見える。その顔立ちからは、意志の強さが溢れ出ていた。

おそらく年齢は寿々花より少し上だろうか。

滲み出る野心を隠さず、上質なスーツを着こなす彼に寿々花は内心眉根を寄せた。

上流階級で育った自信家のお坊ちゃんには、鼻持ちならない奴が多い。

野心家で傲慢な父や兄、その取り巻きたちの我が強さに辟易している寿々花としては、あまり関わりたくないタイプの人種だ。

早々にその場を離れようと、会釈して立ち去ろうとする寿々花の脇を、涼子がすり抜ける。

「スマホ、パウダールームに忘れてきたみたい。見てくるから、ちよつとここで待ってて」

それなら自分も一緒に行くと、寿々花が声をかけるより早く、涼子が小走りで離れて行ってしまった。

「ちよつ……」

中途半端に手を伸ばしたまま、寿々花はかたわらにたたずむ彼をチラリと窺う。

視線に気付いた彼が「んっ？」と、視線で問いかけてくるが、話すことは別にない。

ただ、ここで涼子を待たなくてはいけない以上、できれば彼には立ち去ってもらいたいのだが。その時、辺りに一際大きな笑い声が響いた。

見ると、人の輪の中心で父の廣茂が豪快に笑っている。

——こんなところを、父やその取り巻きに見られたら面倒なことになる……

廣茂は、常に周辺の状況を把握していないと気が済まない困った性分の人だ。

そのため、いい年をした娘のプライベートにもなにかと口を出してくる。

周りの話に機嫌良く笑っている廣茂は、まだ寿々花の存在に気付いていないようだった。

慎重に廣茂の様子を窺っていた寿々花に、男性が話しかけてくる。

「芦田谷廣茂氏——傲慢で我が強く、財界人の間でも度々話題に上る困った御仁だ。常に話の中心にいて、もてはやされていないと気が済まない御山の大将だよ」

「えっ」

突然の発言に驚く寿々花へ、眉をひそめた彼が続ける。

「他人の結婚式に来てあの調子では、さすがに悪目立ちがすぎる」

「……っ」

身内に対する辛辣な評価に、カッと頬が熱くなる。

自分とて、似たような不満を廣茂に抱いている。だが他人に言われると、不快に感じるのだから、

家族とは不思議なものだ。

——確かに困った人だけど、いいところだってあるんです。

それに貴方からだって、なかなかの我が強さを感じますが。

モヤモヤしながら微妙な表情を浮かべる寿々花に、男が強気に微笑む。

「そんなことより……」

話題を変えようとした彼の言葉を遮り、寿々花が口を開いた。

「確かにあの人たちの態度はいかがなものかと思えますけど、せつかくのお祝いの場で、よく知りもしない人の悪口を言うのもどうかと思いますけど」

フンツと鼻息荒く返す寿々花に、彼が驚いた様子で瞬きをする。

しかしすぐに、目尻に皺を寄せてクシャリと前髪を掴んだ。

「確かに。失礼した」

あっさり自分の非を認めて謝る男の表情が子供っぽくて、寿々花の方が拍子抜けしてしまう。

感情に任せて言い返してしまったことを謝ろうかと悩んでいると、スマホを手にした涼子が戻ってきた。

「ごめん。お待たせ。比奈のところ行こう」

そう言って、涼子は駆け寄ってきたままの勢いで寿々花の腕にしがみつく。

その衝撃で寿々花がよろめくと、すかさず男が腕を伸ばし支えようとしてくれる。

男の気遣いに気恥ずかしさを感じつつ、お礼とお詫びを言わなくてはいけないと顔を上げた。

「あ……」

首筋に浮かぶ血管がわかるほど近くに男の顔があつて、驚きのあまり言葉を呑み込む。

「なにかな？」

口を開いた方がいいが、続ける言葉が出てこない。

ポカンとした表情で見上げていると、少し距離を取った男が考え込むようになしぐさをした。そして、おもむろに手を伸ばし、寿々花の頬を軽く摘まむ。

「——っ！」

不意打ちの行為に寿々花が目丸くすると、男性がくつりと笑って手を離れた。

「君は、黙っていると落ち着いた美人に見えるのに、実際は少し危なっかしいな」

子供を窘めるような、優しい口調で微笑みかけてくる。

初対面の女性の頬に躊躇いなく触れてくる男に、女性への馴れを感じる。と同時に、子供扱いされたことに腹が立った。

どういう種類の対抗心なのかはわからないが、こういう負けず嫌いなところは、父親譲りなのかもしれない。

子供扱いされたままでたまるかと、寿々花は背筋を伸ばして表情を改める。

そしてアイシャドーとマスカラで強調した目を軽く細め、顎を突き出すようにして微笑んだ。

「——っ」

さっきまでと違う妖艶な表情に、相手が戸惑っているのがわかる。

心の中で「ザマアミロ」と舌を出しながら、澄ました表情で告げた。

「ほんの一瞬言葉を交わしただけで、相手のことを熟知り顔で語る。それこそ、子供じみた危なっかしい判断かと思えますけど」

「……なるほど。気分を害したのなら悪いことをした」

余裕綽々、魅力溢れる大人の男の笑みを浮かべて返される。

——こつちも負けず嫌いだ。

言葉では素直に謝罪する男の表情から、自分と同じ負けず嫌いの匂いを感じ取る。

だが、ここで互いの性格を明らかにし合う必要もないので、密かに男を「ミスター負けず嫌い」と命名しつつ、寿々花は艶やかな笑みを浮かべてその場を離れた。

隣を歩く涼子が「なに、さっそく運命の出会い？」と茶化してくるのを無視しながら、控室に向かった。

新婦の控室を覗くと、ウェディングドレスを着た比奈が椅子に腰掛けたまま手を振ってくる。

寿々花と涼子の顔を見た瞬間、緊張で強張っていた比奈の表情がぱっと輝いた。

その表情の変化を見れば、涼子の判断が正しかったのだとわかる。

「おめでとう」

祝福の言葉と共に涼子と二人、比奈に駆け寄った。

「ありがとう」

緊張した様子の比奈だが、それ以上の幸福感に満ち溢れている。

積極的に結婚したいとは思わないが、幸せそうな比奈を見ると、運命の人と心を通わせた彼女を素直に羨ましく思う。

しかし、何気なく触れた比奈の手は、薄いレースの手袋ごしでもわかるくらい冷たい。

その手を温めてあげたくて両手で包み込むと、比奈が恥ずかしそうに笑った。

「寿々花さん、お母さんみたい」

その言葉に、控室に母親の姿がないことに気付く。

彼女と母親の関係はあまり良好とは言えず、今日の式も欠席すると聞いていた。

「國原さんとなら、間違いなく幸せになれるわ」

祈るように比奈の手を強く握る。

そんな寿々花の言葉に、比奈が少し複雑そうな顔をしたのは、寿々花が昂也の見合い相手だったからだろう。

寿々花はかつて、昂也に憧れの感情を抱いていた時期があった。

現状を見れば見合いの結果は説明するまでもないが、昂也は彼の仕事の補佐役だった比奈を選び、

二人は結ばれることになったのだ。

つまりは、昂也にフラれる形となった寿々花だが、その結果に異存はない。

そう思えるのは、昂也の選んだ相手が比奈だからだろう。

見合いをきっかけに知り合い、仲良くなった比奈は、今では寿々花のかけがえのない親友である。

比奈を知れば知るほど、彼女の強さと前向きさに尊敬の念を抱く。

そして二人を間近で見ていると、自分が昂也に抱いていた感情が、ただの憧れでしかなかったと
はつきりわかった。

「自分が繋いだ縁を信じて、幸せになつて」

比奈の手を強く握って微笑みかける。するとそこへ、涼子が自分の手を重ねてきた。

「次は私たちも、運命の人を見つめるから」

「涼子さん……」

嫌そうな顔をする寿々花に、涼子がニヤリと笑って「寿々花さんは、さっきの人なんてどう？」
と、付け足してくる。

「さっきの人？」

不思議そうな顔をする比奈に、涼子は「ミスター負けず嫌い」との遭遇と、彼に対する寿々花の
笑顔の応酬について、嬉々として語り始める。

さも恋物語が始まるような印象を与える涼子の話し方には、苦笑いするしかない。

——それでも……

この幸せに満ちた空間に自分がいることが、寿々花は嬉しくて仕方がなかった。
幾つかの縁が重なって仲良くなった二人が、今では手放せない存在となっている。



ホテルのチャペルで行われた結婚式と披露宴が終わると、一部の参列者は二次会へと向かった。
新郎の仕事関係の出席者が多かった式と披露宴とは違い、二次会は新郎新婦の友人がメインと
なっているため、一気に雰囲気華やかになるように感じる。

二次会からの参加者もいて、ビュッフェスタイルの会場は、華やかな空気と同じくらい活気が
あつた。

——色彩も空気も、さっきまでとは大違い。

二次会の会場であるレストランの中庭に出た寿々花は、軽く首を動かし筋肉を解す。

披露宴の間、どうしても廣茂やその取り巻きたちの言動が気になって落ち着かなかったが、ここ
からは彼らの存在を気にすることなくのびのびと楽しむことができる。

そんな開放感から、中庭に咲く花々を眺めていた寿々花は、バラの垣根に立つ人の姿に気が付き、
そつと眉間に皺を寄せた。

「また会ったな」

電話をしていたのか、式の前に会ったミスター負けず嫌いが、スマホをジャケットの内ポケット
にしまう。

寿々花に歩み寄りながら「縁があるな」と、微笑みかけてくる。

式や披露宴の間、式場で彼と顔を合わせることはなかった。だが、二次会の会場にいることは、彼は新郎側の参列者なのかもしれない。

「同じ式に参列していたのなら、顔を合わせるのは必然かと」

また子供扱いされて頬を摘まれては堪らない。

表情を作り、できるだけ落ち着いた口調で返す寿々花に、彼は面白そうな顔をして答えた。

「じゃあ、國原が新婦と出会った時から、俺たちの縁も始まっていたのかもな。また会いたいと思っていたから、会えてよかった」

「……」

——齒の浮くような台詞をヌケヌケと。

さつきまでとは違う意味で、静かに目を細める寿々花を見て彼が笑う。

「君は面白い子だな」

悪戯を楽しむ子供のような口調からして、さつきの齒の浮くような台詞は、本気で言ったわけではないらしい。

だとしたら、本気で反応してしまった自分が恥ずかしくなる。

——やっぱりこの人は苦手だ。

仕事じゃないんだから、苦手な人と無理して一緒にいる必要はない。そう結論付け、寿々花はその場を離れようとする。その手首を、彼が掴んできた。

「待て、もう一度会いたいと思っていたのは本当だ」

「……？」

まだからかってくる気なのかと身構える寿々花に、彼は神妙な顔で言う。

「君にちゃんと謝っておきたかったんだ」

「謝る？ なにをですか」

「友人の結婚式で、不愉快な思いをさせてしまって申し訳なかった」

「……その件に関しては、私も感情に任せた発言をしてしまいましたから」

「いや。俺のせいで、君に嫌な言葉を言わせてしまった。いくら正しいことでも、人を注意するのは愉快じゃなかっただろう」

彼が謝りたかったのは、自分の発言についてではなく、寿々花の気持ちに対してだったようだ。

彼の言うとおりに、人を注意するのは気分のいいことではない。

でも大抵の人は気付いたとしても、あえて謝ったりはしないだろう。

スルーできることを、ちゃんと言葉で伝えてくれた彼の姿勢に、ふと心が和む。

「私の方こそ、そういう言葉を言わせてすみません」

寿々花も頭を下げると、彼が小さく笑う。

「やっぱり君は面白い」

「……」

その言い方は面白くないが、言い返すのも子供っぽいので聞かなかったことにする。

そんな寿々花に、何気ない様子で彼が告げた。

「以前ビジネスの場で、芦田谷会長に痛い目に遭わされたことがあったから。顔を見ると、ついね」
「それは……」

彼の言葉で、大体の事情が察せられた。

芦田谷廣茂という人はビジネスの場において、とても厳しい人間だ。

普段から我が強く、自分の信念を強く主張するあまり周囲の者を振り回す傾向にあるが、仕事が絡むとその傾向がより顕著になってしまう。

人より商売感覚が優れているのだが、彼にしか見えていない法則に従い重要事項の決断を下すので、その意図が汲み取れない周囲は、傲慢な彼の言動に振り回される形となるのだ。

もしかしたら彼も、そういった父の横暴な振る舞いによって痛手を被ったのかもしれない。

「君にはまったく関係のない話なのに、不愉快な思いをさせて申し訳なかった」

「いえ……」

彼の話しぶりからして、寿々花が廣茂の娘とは知らないのだろう。

だとしたら、ここで本名を告げて謝罪しても、お互い気まずくなるだけだ。

——どうせもう、二度と会わない人だし。

それなら真実を告げて、わざわざ気まずくなる必要はない。

謝罪を受け入れた寿々花が、会釈をしてその場を離れようとした時、よく見知った人が、こちらへ歩いてくるのが見えた。

「ここにいたのか」

二人に向かって軽く手を上げるのは、今日の主役の一人である新郎の國原昂也、その人だ。

「やあ、國原。今日はおめでどう」

ミスター負けず嫌いが、癖のある笑みを浮かべながら続ける。

「仕事人間のお前が、まさか恋愛結婚するとは思わなかったよ。職場で相手を見つけたのは、お前らしいけど」

やっぱり彼は、昂也側の招待客のようだ。砕けた口調から察するに、親しい間柄なのだろう。

「自分でも、思ってたなかったよ」

ミスター負けず嫌いの皮肉に、昂也がはにかんだ表情を浮かべる。その表情を見れば、彼が今日という日をどういう気持ちで迎えたのかわかるというものだ。

「改めて、おめでどうございます」

昂也の表情を見て、寿々花も心からの祝辞を述べる。

そんな寿々花に笑顔で応えながら、昂也が不思議そうに二人を見比べた。

「ところで、二人は知り合ってたの？」

「いや。今日が初対面だよ。そういえば……」

と、ミスター負けず嫌いが寿々花の方を向き、右手を差し出してくる。

「今さらだけど、新郎の友人で、鷹尾尚樹です」

「あ……」

しまった。こうなる前に、離れるべきだった。

——だからって、今頃になって昔田谷の名前を出すわけにもいかないし……
差し出された手を見つめ、どうしようかと悩んでいると、遠くから自分を呼んでいる涼子が目に入った。

その瞬間、寿々花の口から言葉が飛び出る。

「や、柳原寿々花……です」

昂也が微かに目を見開くのがわかったが、気付かないフリをした。

——お願いします。なにも言わないでください！

そう祈りながら、ミスター負けず嫌い改め、鷹尾尚樹の手を握り返した。

どうか、しょうもない嘘を見逃してください。そんなうしろめたさから、相手に向ける笑顔の艶やかさが増してしまう。

そして、本人にその自覚がなくとも、それは異性を魅了するのに十分な役割を果たすものだったらしく、尚樹が一瞬、呆けたように動きを止めた。だが寿々花に、それに気付く余裕はない。

「では、友人が呼んでいますので」

昂也になにか言われる前に、と寿々花は妖艶な笑みを残して、足早にその場を離れた。

「助かった」

涼子と合流した寿々花が、胸に手を当ててホッと息を吐く。

「専務と、なにを話してたの？」

昂也のことを役職で呼ぶ涼子に、首を横に振る。

「さっきの人と専務が知り合いで、簡単な挨拶をしてただけ」

その説明に嘘はない。

ただ話したくないことを、話さないだけで。

「それより、私に用があるんじゃないの？」

サラリと話題を変える寿々花に、涼子がハッと表情を変える。

「そうだ。寿々花さんに助けて欲しくて」

涼子は寿々花の手首を掴むと、そのままレストランの中へ入っていく。

「なにかトラブル？」

「トラブルっていうか、比奈が面倒くさそうな子に絡まれてるの。たぶん、あの手の子の対処は、寿々花さんの方が向いてる気がして」

「……？」

——どういう意味だろう。

よくわからないまま涼子の後について会場を進む寿々花は、目の前の光景に小さく声を漏らした。

「どうかした？」

寿々花の声に反応して、涼子が足を止める。

「さっきメイクを直している時に、学生時代に苦手だった同級生のことを思い出したの。その時は名前が思い出せなかったのだけど、今思い出したわ」

そうだ、自慢話が好きで、自分が一番でないと気が済まない人。学生時代、散々寿々花に絡んできた彼女の名は、三瀬朱音といった。

「このタイミングで、急になに？」

怪訝な顔をする涼子に、寿々花はレストランの奥を顎で示して言う。

「いえ、本人がそこにいるものだから」

寿々花の視線の先で、大人になった三瀬朱音が、比奈に絡んでいるようだった。

その様子を見て、寿々花はため息を漏らす。朱音の性格を知っているだけに、彼女が比奈に一般的な祝辞を述べているとは思えない。

——どうやってここに紛れ込んだのかしら……

比奈の知り合いという線はあり得ないだろうが、昂也が招いたとも思えない。

派手な装飾の深紅のドレスを身に纏い、そのドレスに負けない派手なメイクをしている朱音は、遠目で見てもかなり目立つ。どれだけ人が多くても、あそこまで悪目立ちしていれば嫌でも目に付いたはずだが、披露宴で見かけた記憶はない。

おそらく二次会から、知り合いの知り合いといった感じで紛れ込んだのだろう。

そんな推測を立てながら、朱音の死角からそっと二人に近付き、会話に耳を澄ませる。すると、なんともくだらない話が聞こえてきた。

「えっ嘘でしょ。飛行機でエコノミーを使うの？ それじゃあ、チェックインに異様に時間かかるじゃない。空港ラウンジも使えないし、シートだって狭いんでしょ？ 私、そんな窮屈な移動には

耐えられないわ」

「エコノミーでも、オンラインで予約すれば、それほどチェックインに時間はかかりませんよ。空港のラウンジが使えなくても不自由はないですし、私は小柄だから座席も気になりません」

丁寧な答える比奈に向かって、朱音は馬鹿にしたようにため息を吐く。

「あり得ないわ。だってエコノミーって、国際線でもアメニティ置いてないんでしょ？ そういう安い扱って、私許せないの」

何故人の結婚式に来て、飛行機のクラスについてここまで絡めるのか。

——まあ、理由はわかっているけど……

自分の方が豊かで恵まれた生活をしていると、知らしめたいのだ。

おそらくこの調子で、朱音はずっと比奈に絡んでいたのだろう。それを見かねた涼子が、寿々花を探しに来たのだと理解する。

——確かにこれは、自分の領分だろう。

寿々花は自分の両頬を軽く叩いて気合を入れると、強気な表情を作って二人の会話に割って入る。「ビジネスクラスのシートって、完全にフラットにならないって本当？」

突然聞こえてきた声に、朱音の肩がビクリと跳ねた。

勢いよくこちらを向いた朱音が寿々花の顔を見つめ、次の瞬間、驚いた様子で口を開いた。

「あ、あなた、芦田谷さん……?？」

「ええ、お久しぶりね」

「どうして貴女がここに!？」

「新婦の友人なので」

どこか蔑みを含んだ朱音の表情に、級友との再会を懐かしむ気配はない。

もちろん寿々花にも、彼女との再会を喜ぶ気はないのだが。

そんなことを思いつつ、寿々花はあえていつもとは違う高飛車な口調で朱音に尋ねる。

「私はファーストクラスしか使わないから教えて欲しいの。ビジネスクラスは、食事やアメニティがファーストクラスと違うらしいわね。どう違うのか教えてくれる？」

「……っ」

寿々花の問いに、朱音がグッと唇を噛む。

どう違うかは、ファーストクラスにも乗っていないと説明できないはずだ。エコノミーにこだわ先ほどの会話から、朱音はファーストクラスには乗っていないと踏んだのだが、当たつたらしい。ちなみに寿々花が、さして興味のないクラスの違いを知っているのは、ファーストクラスしか使わないと言うのが嘘だからだ。

なにも知らない子供の頃は別として、寿々花にとって飛行機は単なる移動手段でしかないのだから、必要に応じてビジネスでもエコノミーでも普通に使う。

特に仕事で利用する場合は、席のえり好みなどしては利便性が損なわれるだけだ。

国際線だつて、最近ではファーストクラスを減らして、ビジネスクラスを増やす傾向にあるのだから、座席をファーストクラスに限定しているわけがない。

——何故そこに気付かないのかしら？

頻繁に利用していれば、簡単に気付きそうなものなのに。

彼女が今なにをしているかは知らないが、実家は確かアパレル関係の事業をしていたと記憶している。

そういえば学生時代、彼女に目を付けられたのも、何気ない会話の中で寿々花がファーストクラスにしか乗ったことがないと口にしたのがきっかけだった。

くだらないことを思い出してしまったと、ため息を吐く。

そんな寿々花のしている先で、おとなしく会話を聞いていた比奈がおもむろに口を開いた。

「もしエコノミーに興味があるのでしたら、プレミアムエコノミーを試してみてくださいはどうか？主人も仕事の際によく利用していますが、快適らしいですよ」

明るい表情で、比奈がそうアドバイスする。新婦がはにかみながら口にした「主人」という言葉に、朱音の頬がヒクリと引き攣つたのがわかった。

そのやり取りに、涼子がクツと喉を鳴らして笑いを噛み殺すと、朱音の頬がまた引き攣る。

「さすが國原さん、正しくお金を使うポイントをわかっていらっしやる」

持っているからといって、ひけらかせばいいというものではない。

澄ました顔で比奈と会話する寿々花に、朱音の表情が歪んだ。だがすぐに、意地の悪い表情を浮かべる。

「ふーん。そういう人だから、結婚もリーズナブルなところで済ませたのでしょうね。お気の毒様」

最後の「お気の毒様」のところ、朱音が寿々花に意味ありげな視線を向けてくる。それが気になったが、そんなことより、大切な友人をバカにするような彼女の発言は許せない。

不快感を隠さずに朱音を見ると、彼女はターゲットを寿々花に移したらしい。かつてよく見た、嘲りあざわらの表情を向けてくる。

「そういえば芦田谷さん、随分雰囲気が変わったのね。昔と違って派手になってるから、一瞬、誰かわからなかったわ」

だからなに？ と、寿々花が視線で問いかける。

朱音は、わざとらしくはしゃいだ声を出した。

「だって学生時代の貴女って、いかにも数学オタクって感じてダサかったじゃない。あまりに別人すぎて、整形を疑うレベルだわ」

朱音が口元を手で隠してキャハハと、甲高い笑い声を上げる。そのまま、意地の悪そうな顔で寿々花と比奈を交互に見ながら言う。

「もしかして、黒歴史だったりする？ 今のオトモダチに内緒にしたなら、ごめんなさいね。でも面白いから、今度昔の写真を見せてあげるわよ。笑えるから」

やけにテンションの高い朱音の狙いは、なんとなくわかる。

寿々花が冴えないオタク女子だった過去を隠していると思ひ込み、それをバラすことで、寿々花に気まずい思いをさせたいのだろう。

そんな朱音の思惑とは裏腹に、朱音のテンションに驚き一瞬目を丸くした比奈が首を横に振る。

「見なくても知ってます。でも、なにが笑えるのかわかりませんが」

比奈の返事に、朱音が面白くなさそうな顔をした。相手の痛いところを突いたつもりが、あっさりかわされ面白くないのだろう。

昔とまるで変わらない彼女の態度に、寿々花はそつと息を吐いた。

いついかなる場所でも、自分が優位に立っていないと気が済まないのだ。

——だからって、いつまでもそれが通用すると思っているなら大間違いよ。

わざわざこの場所に来たのだから、他にもなにか目的があるのかもしれないが、いい迷惑だ。

——この手はあまり使いたくないんだけど……

大切な友人の結婚式で、これ以上朱音に空気を悪くされるよりよっぽどいい。そう結論付けた寿々花は、彼女に顔を寄せた。

「もしかして貴女、本気で芦田谷家と喧嘩をしたいのかしら？」

「——っ」

その一言で、朱音の顔が強張る。

微かに体を後ろに引いた朱音の目をまっすぐ見据え、自分がその気になれば、ただの脅しでは済まないのだと暗に告げる。

自分の家が政財界でどのくらいの影響力を持つかは承知している。

学生の頃ならいざ知らず、朱音にもその言葉の意味するところはわかったはずだ。

「……っ」

顔色を失った朱音は、悔しげに唇を噛みその場を離れていった。

本来なら謝罪を求めたいところだが、これ以上彼女と言葉を交わすのも面倒なのでそのまま見送る。そんな寿々花の脇腹を、比奈がつついてきた。

「私のせいで、嫌なこと言わせてごめんなさい」

寿々花が家の名前を使うのを嫌っていることを知っている比奈が、申し訳なさそうに肩を落とす。その姿に、先ほどの尚樹を思い出した。

彼の謝罪に何故か心が和んだのは、たぶん比奈のようだと思っただからだろう。

「貴女の後ろ盾になりたいと申し出たのは、私の方よ。こういう時のために、私がいるの」

これくらいいたしたことないと笑顔で返し、レストランの中を見渡す。すると、自分に向けて視線で礼を言う昂也と目が合った。でもその隣に、尚樹の姿はない。

「……」

何気なく首を動かし、尚樹の姿を探してしまふ。

ただどすぐに、自分らしくないと思ひ至り、彼を探すのをやめた。

2 再会

比奈と昂也の結婚式から十日後。

技術開発室でデータの確認をしていた寿々花は、先輩の松岡晃まつおかあきに声をかけられ顔を上げた。

目が合うと、何故か松岡が驚いた様子で後ずさる。

自分から話しかけておきながら、寿々花が反応する度過剰に驚くのは、もはや彼の癖のようなものなので気にしないことにしている。

「来客。応接室に、本社から」

寿々花が籍を置く技術開発部は、クニハラの本社から少し離れた郊外にある。そのため、本社から来客があるのは珍しくなかった。

打ち合わせの場合、会議室で話をするのが常だが、今日は違うらしい。

松岡にお礼を言い、席を立つ。

その背中に、松岡が「専務だから」と、追加情報を伝えてくる。

「専務……」

それは少し珍しい。

専務の昂也は忙しい人なので、よほどのことがない限りここを訪れることはない。

悪い知らせではありませんように、と祈りながら寿々花は足早に応接室へ向かった。

「失礼します」

ドアをノックして中に入ると、昂也が悪戯いたづらっぽい表情を見せる。

「やあ、柳原さん」

「えっ？」

昂也の言葉に小さく目を見開くのは、技術開発部の責任者である江口良和えぐちよしかずだ。

「冗談だ。この前は、式に出席してくれてありがとう、芦田谷君」

驚く江口を尻目に、昂也が涼しい顔で言う。

「いえ。その節は、失礼いたしました」

頭を下げつつ、勧められるままソファーに腰掛ける。

そんな寿々花を見てくすりと笑った昂也だったが、すぐに表情を改めて仕事の話始めた。

「他社との自動運転システムの共同開発ですか」

話を最後まで聞いた寿々花が、思わずといったように言葉を漏らす。それに、昂也が深く頷いた。

「そうだ。まだ調整をしている段階なので内密にして欲しいのだが、レベル5の自動運転システムを構築するために、AI開発のノウハウに長けた他社との連携を考えたい」

世界的自動車メーカーであるクニハラ。その国内商品に搭載されている自動運転システムは、現在レベル2。部分的に運転を自動化しているレベルだ。

運転を完全自動化するレベル5のシステムも、限定的な条件下でのテスト走行までは進んでいるが、実用化に辿り着くまでにはまだまだ課題も多い。

自動運転において、AIに求められるものは大きい。様々な状況に応じた空間把握能力はもちろん、アクシデントへの適切な対処法や咄嗟とつさの判断能力も必要になってくる。そして、それだけの処理をAIに任せる以上、ハッキング対策などセキュリティの強化も欠かせない。

人の命を預かるのだから、念には念を入れて取り組む覚悟が必要だ。

今までも、必要に応じてアドバイザー契約をしている有識者に意見を求めてきたが、AI開発がより一層重要視されるこれからは、専門の企業と二人三脚でシステム開発にあたっていくのだという。

現在、業務提携先として、SANGIサンギというIT企業が内定しているそうだ。

「まだ交渉中で、SANGIで決定というわけじゃない。そこで、正式な契約を結ぶ前に、一度相手側の担当者や社長を交えた食事を開くつもりだ。そこで、今後の方針や互いの希望を摺り合わせたいと考えている」

「はあ……」

それが自分とどう関係しているのだろうと首をかしげる寿々花に、昂也が告げる。

「このプロジェクトは、芦田谷君に陣頭指揮を執ってもらう予定だ。だから、君にもその食事に同伴してもらい、先方の技術力のほどを判断して欲しい」

突然のことに戸惑い、寿々花は隣に座る江口の顔色を窺う。どうやら、既に昂也との話し合いは

済んでいるらしく、冷静な表情で寿々花の回答を待っている。

責任の重さを感じながら、寿々花は昂也と江口がいいのならと承諾した。そんな彼女に、昂也は S A N G I の技術者と、過去に手掛けたプロジェクトに関する資料を渡し、食事会の場所と時間を告げた。

話を終えた昂也を車まで送ることになった寿々花は、二人きりになったタイミングで彼の友人に名前を偽ったことを詫びた。

「まあ、わからなくもないよ。芦田谷は重い名前だ。油断すると、君個人の私生活を侵食してくるからな」

昂也の言葉に、寿々花はそつと視線を落とす。

「國原さんは、自分の生まれを窮屈きゆうくつに思ったことはないんですか？」

寿々花が抱える息苦しさを、昂也も感じたりするのだろうか。

昂也は軽く肩をすくめてみせる。

「そのように生まれてしまったからな。家族にも会社にも愛着があるから、手放すわけにはいかない。君も芦田谷の人間であることをやめられないのなら、自分なりに上手うまく折り合いを付けていくしかないんだよ」

そう言つて、昂也はそつと笑う。だが、すぐに真面目な顔で付け足した。

「俺は常々、部下には『面倒事から逃げるな。面倒だからといって問題を先送りになると、大抵事態は悪化する』と教えている。そのことを忘れないように」

咄嗟とつさに名前を偽ったところで、寿々花が芦田谷家の人間である事実が変わらない。その事実から目を逸らしても、なんの解決にもならないと言いたいのだろう。

「わかつてます」

あの時はいろいろとタイミングが悪くて、本当の名前を言い出せなくなってしまったのだ。

それでも嘘はよくなかったと反省する寿々花に、昂也が意味ありげに笑った。

「まあ、嘘の代償は、近いうちに支払うことになるよ」

その意味を問う前に、車に辿たどり着いてしまった。

運転手が恭こつやしく頭を下げ、彼のために後部座席のドアを開ける。それに応こたえる昂也の顔は、気さくな友人の夫ではなく、大企業の重役の顔をしていた。

「では、食事会は頼むよ」

そう言い残し、昂也は去つて行った。



食事会は、その週の金曜日に開かれることになった。

当日、事情を知る江口に定時であがらせてもらった寿々花は、待ち合わせ場所へと向かう。

「まだ誰も来てないのかな？」

都内にあるホテルのラウンジに着いた寿々花は、周囲を見渡し見知った顔がないことを確認す

ると、入り口から見えやすい席を選んで腰を下ろす。

約束の時間まで三十分ほどあるので、寿々花はタブレットを出して読書を始めた。

読書といっても、寿々花が読むのはたいいてい数学の論文だ。

若い研究者の論文は、拙い部分もあるが発想が柔軟で面白い。暇つぶしにはちょうどいいと読み始めた寿々花は、いつしか論文に集中してしまっていたらしい。

ふと時間が気になって顔を上げた次の瞬間、大きく背中を仰け反らせる。

「——っ！」

いつの間にか、自分の席と通路を挟んだ向かいのソファーに、見知った顔が座っていた。しかも相手は、ソファーの肘掛けに頬杖をつき、じっと自分を眺めているではないか。

「熱心だな」

「……鷹尾さん」

ゆっくりと立ち上がった尚樹は、薄い笑みを浮かべてこちらへ歩み寄ってくる。そのしなやかな足取りは、まるで獲物を前にしたネコ科の大型獣を思わせた。

今日の尚樹の装いは、先日比べると華やかさは控えめだ。しかし、質のよいビジネススーツを優雅に着こなす彼には、強烈な存在感がある。

——まさか、こんなところで会うなんて……

もう二度と会うことはないだろうと思っていたのに。

「また会ったな」

気まずさから愛想よく微笑む寿々花の向かいに、尚樹がドスツと腰を下ろす。

「あの……、私は人と待ち合わせをしているんですけど」

「俺もだ」

長い手足を持って余すように股を広げて座る尚樹は、寿々花がテーブルの上に置いたタブレットを手取る。

「あっ」

タブレットを奪われて戸惑う寿々花に構うことなく、尚樹は画面をスクロールさせる。

そしてそこに書かれている内容を確認して、不思議そうな眼差しを寿々花に向けてきた。

「なんだ……随分いい顔で読みふけているから、恋人からのメールか、恋愛小説かと思ったのに。それ数学の論文だろ？ しかも英文」

つまらないといった表情で、尚樹がタブレットを返してきた。

「恋人はいませんし、恋愛小説なんて疲れるものも読みません」

思わず不満げな表情で言い返し、寿々花はタブレットを受け取る。

「疲れる？」

「恋愛小説には、駆け引きや嫉妬心のような疲れる内容が多いので」

その点数学は、駆け引きも裏切りもなく、ただ純粋な問いと解答があるだけだ。

もともと誰かが和訳してくれるのなら、寿々花だって日本語の方が楽だとは思う。

「純粋だな」

尚樹の眩きに、寿々花の眉がピクリと跳ねる。

「子供扱いしないでください」

「そんなつもりはないよ。恋愛小説を読んで疲れるのは、それだけ感情移入しているってことだ。きつと君は、実在しない物語の登場人物のために泣いたり喜んだりするんだらう？ その感情の柔軟さを褒めただけだ」

不機嫌さを隠さず食ってかかった寿々花を、尚樹が優しく諭す。しかしすぐに、からかうように付け足した。

「ただし、純粹と言われて腹を立てるのは、いささか子供っぽいと思うが」

「……」

なんともいえない表情を浮かべる寿々花の顔を、肘掛けに頬杖をつけて尚樹が観察してくる。

その表情が、余裕綽々といった感じで面白くない。でもここでなにか言い返したら、また子供っぽいと言われてしまう気がした。

——この人となると、上手く自分を保てない。

寿々花は、心の中でため息を漏らす。

「申し訳ないですけど、仕事の待ち合わせをしていますので……」

だから貴方と話している暇はありませんと、そのつない笑みを添えて伝える。すると尚樹が「奇遇だな」と返した。

「俺も、ビジネスの話をするためにここに来た」

「……」

その瞬間、寿々花は息を呑んだ。

先日、昂也は「嘘の代償は、近いうちに支払うことになる」と話していた。

そして、昂也に指示された待ち合わせ場所に、ビジネスの話をするために来たと言って尚樹が現れたのだ。

嫌な予感に頬を強張らせる寿々花を見て、尚樹が目を細める。

「この前、クニハラの社員とは聞いていたけど、今日の同伴者が君だとは思わなかったよ」

尚樹の言葉に、体からどんどん血の気が引いていく。そんな寿々花に、尚樹が右手を差し出してきた。

「改めまして柳原寿々花さん。S A N G Iの社長をさせてもらっている鷹尾尚樹だ」

あまりの展開に、目眩を覚える。

神様に、嘘をついたお仕置きを受けた気分だ。

「あの、実は……」

さすがにこれ以上嘘をつき続けているわけにはいかない。そう覚悟を決めた時、こちらへ近づいてくる人の気配を感じて言葉を止めた。

「申し訳ない。待たせたな」

爽やかな口調で昂也が挨拶してくる。寿々花は立ち上がりつつ、あまりのタイミングの悪さに頭を抱えたくなくなった。

そんな寿々花の胸の内に気付く様子もなく、同じように立ち上がった尚樹が鷹揚に笑う。

「俺と柳原さんが、早すぎただけだ」

「やな……」

尚樹の言葉に、昂也がもの言いたげな視線を向けてくる。寿々花は視線を逸らしながら、心の中で「すみません。ちゃんと本当のことを話そうと思っていたんです」と言い訳した。

「奥さんは？」

尚樹に問いかけられ、小さくため息を吐いた昂也は、寿々花の名前の件に触れることなく尚樹へと視線を向けた。

「別件を任せている。とりあえず、お前のところの社員が来たら、場所を変えるところか」

そう話す昂也が空いていたソファに腰掛けようとすると、尚樹がそれを制した。

「ウチの社員は、俺が帰らせた」

さらには、昂也に向かつて「ついでの、お前も帰っていいぞ」と、虫を払うようにシッシッと手を動かす。

「おい、帰っていいって……」

昂也が困惑した表情を見せる。

「相手が柳原さんなら、初対面というわけでもないし、ウチのことなら大抵は俺が説明できる。どのみち、今後は柳原さんと話すことになるんだから、予行練習みたいなものだよ。奥さんが働いてるなら、今日は早く帰って家のことでもしておいてやれよ」

「しかし、彼女は……」

昂也が思案げに寿々花を見る。だがすぐに、大きく頷いた。

「確かに、俺は帰った方が話しやすいかもしれない」

「そんな、國原さんっ」

悲鳴に近い声を上げる寿々花に、昂也が言う。

「いろいろと、自分の頭で考えて判断するように。それと、ちゃんと説明するんだ」

ちゃんと説明しろ……とは、もちろん名前のことだ。

きちんと自分の意思で本名を告げ、嘘をついたことを謝罪しなさいとお達しに、寿々花は承知いたしましたと項垂れるしかなかった。

昂也は予約してある店の名前を告げると共に、人数が減ってしまったことへの詫びを指示することも忘れない。

「これも、いい勉強だ」

昂也は、情けない顔をする寿々花の肩を軽く叩いて帰って行った。

「……」

立ち去る昂也の背中に深く頭を下げた寿々花は、姿勢を正して尚樹を見る。

——今度こそちゃんと名乗って謝ろう。

覚悟を決めた寿々花が口を開くより早く、尚樹が言った。

「そんなに怯えなくても、取って喰ったりしないよ。もしかして、男と二人で食事をしたことない

のか？」

「……っ！」

大きく目を見開いた寿々花は、ポカンと口を開ける。

「怖じ気づいてないで、ついてこい。別にビビるようなことじゃないよ」

挑発するような視線を向けた尚樹は、顎を動かし寿々花を誘う。

——どうして私が、この人に怖じ気づくのよっ！

寿々花はムツと口を一文字に結び、彼の後を追った。

予約を入れていた割烹料理店に入り社名を告げると、すぐに個室へ案内された。

案内してくれた女将に、当初の予定より人数が減ったことを謝罪すると、既に昂也から連絡があったとのことだ。

寿々花には自分で伝えるよう指示していた昂也だが、一応連絡を入れておいてくれたらしい。

——ついでに、鷹尾さんにも私の名前の件を伝えておいてくれたらいいのに……

彼と向き合い、お品書きに視線を落とす寿々花は、そんなことをふと思う。

だが昂也の性格からして、そんなことはあり得ない。

どのタイミングで伝えればいいのだろうかと思いつくと、酒を頼み終えた彼が寿々花に視線を向けてきた。

「他に頼みたいものでも？」

食事はお任せのコース料理なので、酒以外、特に頼む必要はない。お品書きを開いているのは、手持ち無沙汰からだ。

「特にないです」

「そう。じゃあ、これで」

尚樹の言葉に、女将が頷く。

女将が退室してしまうと、いよいよ尚樹と向き合うしかなくなる。

「……あの、名前なんですけど……」

思い切って切り出した言葉に重なるように、尚樹が口を開いた。

「そういえば君は、國原の奥さんとは長い付き合いなのか？」

「え、いえ……まだ二年にもなりません」

出鼻をくじかれた形になり、寿々花はため息を吐きつつ答える。

「そうか……」

目の前で不思議そうな顔をする尚樹に首をかしげた。

「それがなにか？」

「ああいや……二次会で見かけた印象から、長い付き合いなのかと思っただけだよ」

「そうですか」

そう言ってもらえるのは素直に嬉しい。

フツと表情を緩ませる寿々花に、尚樹も表情が和らぐ。